

青空チャペルにて

お早うございます。本日、私たちはJR西日本・福知山線の脱線事故からちょうど1カ月を経て、それを覚え、また祈りを合わせるために、このように集まっています。

この間には107人の方の命が失われ、4百数十人余りの方が病院に入院しておられました。私たち同志社大学においても、3人の学生がこの事故で命を奪われ、当初24人の学生が入院し、今なお退院に至らない人々もいるという状況です。回復してキャンパスに戻ってきた人もおりますけれども、なお心に傷を負ったまま日々を送っている学生は何人もいるわけであります。また犠牲者のご家族や友人たちの感じたショックや痛みも癒されるに至ってはならず、それどころかさらに深まり、広まりつつあるように思います。…そういった状況が今日なお続いているのです。

この事件の直後から、私たちはテレビや新聞、その他さまざまな報道によって、今まで私たちが経験したことのないことがこの学校に起こったという驚きに包ま

め、教員、教職、さらに地域の方々が参加してくださり、共に祈りを捧げてくださいました。先生方の中には自分からその祈禱会の司会を申し出てくださった方もありました。正直なところ、両校地で毎日お祈りの会を持つということが果たして最後までできるものかどうかという思いを持ったこともありましたが、幸いなことにこうした協力や参加を得て、今日まで続けていくことができました。ちょうど今、京田辺キャンパスでも、青空チャペルでこのチャペルアワーの時間を同時に守っていることと思います。

さて、その青空チャペルでも何度か司会を担当し、お祈りをささげてまいりましたが、5月ということもあり、とくに今年には不思議なほど良い天気にも恵まれました。非常に爽やかな気候で、さらさら輝く太陽がちょうど青空チャペルの木々の緑を通して差し込んでくる。風に吹かれて葉がそよぎ、私たちの上にはちょうどいい感じで木陰が覆っている。とても恵まれた環境のもとで集いを持ち続けることができました。

祈りの前にはオルガニストの方が前奏曲を弾いてくれます。そのオルガンの曲

●チャペル・アワー奨励

良心の由来するところ — JR列車事故を考える

レクチャー

キリスト教文化センター
助教授

越川 弘英



れてきました。同時に、ただちに事件の現場へ駆けつけた教職員をはじめ、入院した学生たちへの訪問や安否の確認から始まり、さまざまな形で試行錯誤しながら、この事件への対応をしてきたと思います。1カ月を経ようとしている中で、今週月曜日からはカウンセリングセンターを中心に、個々人の学生へのケアをする態勢もできあがってきました。この間の多くの方々の努力を見るにつけ、学校として、あるいは一人ひとりの教員、職員、学生として、どこまでのがたができたのか客観的にはよく分かりませんが、それでも、しかし私たちのできる範囲の中である程度の対応をしてきたように思います。

こうした対応の一環として、キリスト教文化センターではこの事件を覚えて5月いっぱい臨時の祈禱会として「祈りと黙想の集い」を行ってきました。京田辺キャンパスとこの今出川キャンパスで、月曜日から金曜日までのランチタイムに祈りの時間を設けたのですが、こうした試みというのは、私の知る限り、同志社ではかつてなかったことではないかと思えます。この集いに学生の皆さんをはじめ

を聴きながら、そこに座っていると、青空チャペルの正面、木々の向こう側に京田辺キャンパスの正門が見えるのです。ちょうどランチタイムですから、2講時の終わった学生たちがぞろぞろと知真館やその他の校舎から出てきて、その門を通って帰っていく姿が見えます。また12時を過ぎると、3講時に出るために学生たちがその門から続々と入って来ます。それを見るときもよく見ておりました。この正門をくぐって行き来する学生たち、キャンパスの中を行き交うたくさんの学生たち、何十何百という学生がそのわずか数十分の間に私の目の前の空間を行き来するのです。それを見ていて、ふと思ったことは、事故で命を奪われた学生たちがここを歩むことはもう二度とないのだということでした。たいへん気持ちのいい季節の中で、元気に歩んでいく学生たちを見ていて、そんな当然のことを、逆に非常に強く感じたことを覚えておられます。

「命は大切だ」

今日、司会をしていただいたいの鈴木直人先生は、最近、同志社の校祖である

新島襄の「一人は大切である」という言葉をしばしば引用されることがあります。ご承知のように、この言葉は、新島の外遊中、同志社に問題が起こった一部の学生が退学させられた後、帰国した新島がそれを知り、学内で語った言葉の一つであるとされています。退学させられた学生を惜しみ、その前途を憂いつつ、学生一人ひとりを大切にしていく同志社教育のあり方を示した言葉として、新島はこの言葉を残したのだと思います。

青空チャペルで、行き交う学生たちを眺めながら、私はこの「一人は大切である」という言葉を、少し別の意味で思い起こしていました。退学させられた学生であれば、あるいはその後再び同志社を訪れ、学校の地を踏んだ者はあつたかもしれません。しかし、命を奪われた者はふたたびこのキャンパスを歩くことはありません。その中には今春、同志社に入学したばかりの学生たちもいたのですが、もはやあの門をくぐることはないのです。

失われた命一つ一つに全て失われた未来があり、失われた希望があり、失われた夢があるのです。死がそうした未来や

希望や夢を奪い取っていく。残された多くの人々からもそうしたものを奪い去っていく。ことにそうした死が今回の事故のような形で、予期せぬ不条理な形で起こる場合、私たちの上には失われたものの大きき、苦しさ、不条理さというものをことさらに重く辛く覆いかぶさってきます。「なぜそんなことが起きるのか、起きていいのか」ということを私たちは問います。そして、それに対するはつきりとした答えは出てきません。

ただ、そうした問いへの答えは出てこないとしても、こうした出来事を通して、私たちに幾つかの大事なことが分かってきます。そうした大事なことというのは、多くは単純なことですけども、しかしほんとうに大切なことを、私たちは往々にしてそれが失われた後になって知るので。

この事故が起こった後、その青空チャペルの場に座りながら私を感じたこと、大事なことのひとつはこういうことです。「命は大切だ。」命は私たちにとって大切なものだ。時間的な効率よりも目の利益よりも、一人の命は大切だ……

ほんとうにごく単純きわまりないこと

私たちは知らされています。この事件の後、頻繁にレールに置き石が置かれるようになったこととか、列車妨害をするような事件が起こったということも私たちは聞いています。この事故を通して、いろいろな人々がそれに関わり、いろいろな場面、いろいろな形で、それぞれの人間の生き方、人間というものの姿があらわになったという事実を、こうした報道は伝えております。

たぶん少しでも聖書を読んだことのある人であれば、今も申しました、事件直後に自分の仕事を優先してその場を立ち去った人々と、自分たちの仕事を投げ出して協力した人々の姿を聞いたとき、先ほどお読みいただいたルカ福音書の「善いサマリヤ人の話」を思い出したことであろうと思います。自分の会社の引き起こした事故でありながら去っていった人と、自分には関係ないんだけれども助けようとした人。聖書の話はけっして昔々の物語ではないということであらためて思いました。

さて、そのように事件の渦中であって、そのように事故を引き起こした運転手、犠牲となった人々、立ち去った人々、残

ですが、「命は大切」、そして「殺すよりも生かす方がいい」ということを思ったのです。それは先ほどお読みいただいた旧約聖書の言葉にもあるように、「殺してはならない」（出エジプト記20章13節）ということであり、今から3千年以上も前の人々ですら知っており、今まで語り継がれてきた、そういうとても単純なことでもあります。

事故の背後にあるもの

あの事故から1カ月を経てもなお、突然の喪失感や混乱した思い、さまざまな形の問いは私たちの間に消えることなく残っています。それどころか、先ほどもしやりましたように、近しい方々の中ではさらにそうしたものが深まり、重くなり、あるいは沈潜し、いつどこでそうしたものがほんとうに癒されることになるのか、私たちには分かりません。長い形で学校の中でも、犠牲となった方々への取り組みを続けていかねばならないように思います。しかしまた同時に、1カ月を経て、私たちはこの問題について「考える」という作業を、やはり始めていかなければならない時期を迎えているように

って助けた人々など、さまざまな人間の姿が現れ出たわけでありますけれども、さらにこの事件を考えていくとき、当然ながら、その背後にある構造とか問題というものもまた浮かび出てくることになりました。これもまたさまざまな報道を通じて、JR西日本という会社の体質や制度、その幹部や責任者たちの姿といったものが明らかにされてきました。事故原因をめぐって、責任逃れと言われてもしょうがないような対応を取ったこと、「日勤教育」という「教育」というよりは「いじめ」に近いような形で社員に処するやり方が行われていたこと、そして何よりもスピードに象徴される効率と利益を優先する論理が横行していたこと……。あえて言えば、自分の会社の社員の人格を軽んじ、その尊厳を認めないような組織、人間というものを能力と効率だけで計るような制度のものでそういう価値観に立つ会社が、乗客の命だけを大切にすることはないこと、自分たちがいちばん近しい人間を大切にしない組織は、必ずその周囲の人々にも同じような結果をもたらさざるをえないのだと思います。

も思います。今まで折りつづけてきて、私たちは沈黙の中でこの出来事を見つめ、この事件をなんとか受けとめようとしてきました。今から私たちは「この問題は一体何だったのか?」「私たちにとってこの事件はどういう意味があるのか?」ということを考え、新たな次元でこの出来事に立ち向かうべき時期を迎えつつあるように思います。

この1カ月の間に、事件の顛末や原因、その背景についていろいろなことが報道されてきました。事故の前後に何が起こったか。列車はどんな状況で事故に立ち至ったか。あの運転手はなぜあのような事故を引き起こしたのか。彼の生い立ちや経歴、人柄、そしてJR西日本の中の立場、彼のこれまでのいろいろな行動や、おそらく彼が感じていたかもしれない思いに至るまで、想像をまよえつつ、私たちは詳しく知らされてきました。事故が起こった直後、近くの地域の人たちが仕事を投げ出して救出に協力した話も私たちは知らされました。他方、同じ列車に乗り合わせていたJR西日本の職員が、自分の勤務先に時間以内に行き着くためにそこを立ち去ったということも私

私は牧師であります。人間というのは本来とても弱いものだと思っ

ています。私たちがのそうした判断や行動にもっとも大きな影響を与えているものが、往々にして、その人にいちばん近い人々との関係ではないかと考えています。私たちは人生を生きる上での基本的な価値観とか判断基準を、意識することしな

ないことに関わらず、生まれた時から関わってきた身近な人々、家族とか友人、先生、関わりを持ったさまざまな仲間たちから受け、そうしたものを自分の価値観や判断基準に取り込んで生きているところ

ば、学校内外の友人たち、サークルやゼミの仲間、そして学校の先生などがそれにあたるでしょうし、やがて就職してからは自分が働く会社や組織、その中の人々に身近な人間関係が皆さんの価値観や判断基準に大きな影響を与えていくことになるだろうと思のです。



そういうことから言えば、事故を引き起こした運転手もまた、彼の育ってきた環境やJ・R西日本という組織の中で特定の価値観や判断基準を身につけていた人だったでしょう。おそらく彼もまた先ほどお話しした人間としてのもっとも基本的なルール、「殺してはならない」というルールを知っていたはずで、「殺すよりも生かす方がいい」という基本的なルールを彼は知っていたはずで。しかし、それにもまして、おそらくあの時の彼を縛り、彼の行動を決定づけたものは、そうした基本的なルールとは別のもの一つ、すなわち「遅れてはならない」というルールだったのではないかと思います。3千年以上も前から人間が知っていたルールではなく、会社のルール、組織のルールがより強い声として彼に働きかけ、出さなければいけません。下を出してはいけないうところで出し、やっつてはいけないうことをやっつてはいけないう時にやっつてしまったことよって、あのような取り返しのつかない結果が生じたのです。

聖書の中には時々、「悪魔」とか「悪霊」という言葉が出てきます。現代人で

ある私たちはそうした表現を迷信的なものとしてとらえています。しかし現実の世界を見るときに、人間を文字通り悪魔的な行動に駆り立てる力というものがあるという事実を私たちは今回の事件から知ることができるかもしれません。ひとりの人間をそのような行動に駆り立て、破壊をもたらすような、人間の命や人格を軽んじる価値観や組織、制度といったものは、どこか遠くにある異常なものというわけではなく、私たちのすぐそばに日常的に存在しているのです。J・R西日本だけが悪魔的な会社だということには誰にも言えない。あの運転手だけが悪魔的だったということは誰にも言えない。私たちの社会や世界のあちこちに、同質同様の問題が日常的に転がっているのではないのでしょうか。私は今回の事故を通してそういうことも強く思わされました。

「サマリア人と「良心」」

ここで聖書に戻りたいと思います。先ほどのサマリア人の物語ですが、これはユダヤ人と敵対していた民族です。そうしたユダヤ人のひとりが盗賊に襲われ傷

ついたとき、同じユダヤ人仲間の宗教家たちはこの人を無視して通り過ぎていったと言います。ところが、本来は敵対しているサマリア人がこの傷ついた男を助けようと思ったと言っているのが、この物語のポイントです。

彼を動かした動機はごく単純です。その理由はたった一言、「その人を見て憐れに思ったからだ」「かわいそうに思ったからだ」としか書かれていません。それで彼は行動するのです。憐れみ、同情心、共感、あるいはこれを「良心」というふうに言い換えてもいいかもしれません。そう言い換えるとすれば、この「善いサマリア人の物語」と呼ばれるイエス・キリストのたとえ話とは、「良心の物語」であり、そして私たち同志社にいる者からすれば、新島襄の言葉として繰り返し語りつけられてきた「良心の全身に充滿した人間の物語」であるとも言えるだろうと思います。

私がここで考えてみたいことは、「それでは、その良心というものはいったいどこから来たのか」という問題です。良心の由来するところです。彼はそんなに生まれつき良心に満ちた人間だったの

か、同情心に満ち共感力に満ち、非常によくできた人間だったのでしょうか。またこのサマリア人と先ほどの運転手を比べるなら、二人の間にはもっとも決定的な違いがあったのでしょうか。一方は天使のような人間であり、他方は悪魔的な人間だったのでしょうか。事故の直後に現場を立ち去った人々と、仕事を放り出して救援活動をした人々の場合も、もっと一方は悪魔で他方は天使のような人間だったのでしょうか。私にはそうは思えません。

繰り返し申し上げますけれども、私は人間というのは本来とても弱い存在だと思っています。人間とはもっとも基本的な善悪の判断においてさえ、「次の瞬間」にはどうなってしまうか分からないようなところのある、自分でさえ思ってもかけないような行動を取ることもある、そういう面を持った存在だと思っています。そして、ここが肝心な点なのですが、私はそうした私たちの判断や行動にもっとも影響を与えるのは、往々にして、私たちに最も近い人々、親しい人々、そうした人々や環境からの影響なのではないかと思っています。

私はこんなふうな想像をいたします。このサマリア人が、傷ついた人になぜそれだけ同情心を寄せたのか、良心を持つて行動できたのか。それは恐らく、このサマリア人が子どもの頃から育てられてきた環境、彼の両親や兄弟や家族、友人たちや身近な人々の取り巻くそういう小さい世界の中で、そういうルールを教える人々、なにかしらの形で日々そうしたことを身をもって指し示した人々、モデルとなったような人々がいたのではないかと、ということだと思います。人が傷つき倒れているのを見たら、血だらけになって助けを求めていたら、そのような場合、すぐに手を差し伸べるのが当然だ。それが人間らしい行動というものだ。それをたんなる言葉ではなく、身近な人々の行動を通して、いろいろな出会いや体験を通して、教え知らされていく時、ひとりの人間の中にそうした倫理的なもの、良心というものが育て上げられていく、造り上げられていくのではないかと、私は思うのです。

土壇場になったら私たち人間は何をやるか分からない面を持っているのは事実ですが、しかし、そうした時にもこのサ

マリア人は良心に基づく行動をとったのです。彼がそうした行動をとった、とれたということは、ただ彼一個の問題というだけでなく、その背後には、恐らく今申しましたように、彼を支えたたくさんの人々、彼をそのように育ててきた人々、人間らしい生き方を旨さず人々の思いというものが横たわっていたのではないかと。私はそのように想像いたします。

自分がひとつの列車の運転を任ざれている時、何百人もの命を自分の手に握っている時、いったいどういうルールがいちばん優先されるべきなのか。「遅れてはならない」なのか、「殺してはならない」なのか。これをしつかりわかまえ知り、判断できる人間とならなければなりません。

また、傷つき血だらけになって助けを求めている人がそこにいる時、やはり、「遅れてはならない」なのか、「殺してはならない」なのか、これをしつかりと判断し、行動できる人間とならなければなりません。状況と場面は異なっただとしても、私たちが人生を歩んでいく中で、そのような重大な課題に直面することがないとは誰にも言えないのです。

てそれによつて生きようという志を、私たちが共有するものとしていかなければならないのです。JR事故の悲劇を覚えて集まっている私たちが、今ここで、そうした志を確認することがなければ、いざという時に、それを実践するということとはさらに困難なこととなるに違いありません。

先ほど、あのサマリア人の行動を支えたものの、良心の由来するところは、彼ら身近にいた人々からの影響であり、彼らと共有していた価値観だったのでないかということを示しました。言い換えれば、私たちの身近なところにいる仲間、コミュニティこそ、私たちを支えるのだということですね。何度も繰り返しますが、一人ひとりは大変に弱く、過ちに陥りやすく、流されやすい私たちが、時代と社会の荒ぶる波風の中で何とか踏み止まることが出来るのは、私たちと同じように、より基本的なルールを生きていることが大事だと考える、そういう仲間がいること、また「そういう仲間がいる」ことを知っているということが、とても大きな意味を持つていられるのです。世間がどうであれ、あるいは特定の組織や制度がどうであ

このように基本的でいちばん重要なルール、そしてそれを実践へと導く、人間として人間に対して感じる憐れみ、共感、良心……。こうしたものをつねに温め、いざという時それに従つて行動することのできる人間。そのような人間となるために私たちは自分自身を教育し、またお互いを育て合いたいと思うのです。

私たちの課題

さてしかし、私がこのようなことを言つていられるのは、大学の中にいるからだと言われるかもしれない。一般社会に出ていったら、「おまえは何を甘言しているのか」「効率と実績、利益が第一なんだ、それが現実の世界なんだ」と言う人のほうが恐らく多いことでありましょう。私たちが生きている現代の社会は非常に複雑であるだけでなく、経済的な側面が異常に突出し、弱肉強食の「非人間的」な要素がまかり通る社会であり、また非常に暴力的な一面も持っている社会です。会社や身近な組織の命令が、法律や憲法、私たちの常識や良心といったものよりも、私たちの上に重くの

れ、効率や実績がどうであれ、これだけは譲つてはならないという基本的なルールを知っていること、忘れないこと、そしてそれにしがみつくこと、そういう力を私たちに与え、共にそうした生き方を志す仲間やコミュニティが私たちには必要なのです。

たとえばキリスト教というのは、まさにそうしたものを目ざそうとして生まれてきたコミュニティでした。そして、そのキリスト教を精神的な土台として建てられているこの同志社もまた、そういうコミュニティのひとつであると言うことが出来るでしょう。本来、そのような形の良心に導かれた生き方を志し、その志に結ばれることによつて私たちの学園というものは作られてきたのだと思えますし、また、そうあるべきものだと思います。同志社は今年、創立130年を迎えるわけですが、そういう意味でのコミュニティとして私たちがどこまでやつてこれたのかを、きちんと振り返りつづけていかなければなりません。

今日、最初に申し上げたように、この事故によつて失われた命、失われた未来、失われた希望、失われた夢、その他失わ

しかかり、一挙手一投足を縛り付けるといふことも、決してまれなことではありません。そしてそれに逆らうことが、とてもない不利益を生むということも、現実にはしばしば起きるのです。理想を口にするのはたやすく、現実の中でそれを実践することは困難です。

今まで申し上げてきたようなことを、大学という「安全な場所」で、チャペルアワーという「安全な時間」だからお前はそんなことが言えるのだ、と批判されたとしたら、私としても反論することは困難です。実際、いざその場になつてみたら、私も「遅れてはならない」というルールに身を委ねてしまいかも知れないし、一番最初にその場を立ち去る人間になつてしまいかも知れません。

しかし、だからこそあえて言いたいことは、私たちは今こういうふうな安全な場所にいる時にこそ、こういう時間がまだあるうちに、このような話を語りあい、分かち合い、確認し合わなければならぬということですね。土壇場のような場面が私たちの目の前に突然立ち現れてくる前に、繰り返し繰り返し私たちは基本的なルールを思い起こし、教えあい、そし

れた多くのものは再び取り返すことができませぬ。これは厳然たる事実です。この事件のもので、私たちがまず最初になすべきことは、この失われたものの大きさを心に刻み、悼み、犠牲者と遺族・関係者の方々に神からの慰めと支えを祈り求めることでありました。そして、失われた人々のことを私たちが忘れないという思いの確認でありました。さらにこれらに加えて、私たちが今これからは、犠牲となつた人々も含めて、この同志社というコミュニティ、その志、良心に基づいた生き方というものを今一度はつきりと思い起こし、私たちの世界において本当に求められている大事なものの、基本的なルールを大切にすることを形作つていく思いを確かなものとし、そのために前進していくことでありましょう。

亡くなった方々の魂の平安をお祈りすると共に、この悲劇を忘れることなく、私たち一人ひとり、また学校全体で、この出来事を受けとめていきたいと思えます。

(2005年5月25日、大学「水曜チャペル・アワー」、神学館礼拝堂)